

第63回 東日本実業団対抗駅伝競走大会

【出場結果】

実施日 : 11月3日(木・祝) 8時スタート

コース : 埼玉県庁～深谷駅折り返し～熊谷スポーツ文化公園陸上競技場

総距離 : 7区間 76.9 km

成績 : 3時間56分51秒 20/31位

出場者・リザルト	: 1区 11.6 km	加藤 平	13/31位	34'48"
	2区 8.0 km	小林 航央	16/31位	23'38"
	3区 16.5 km	坪井 響己	20/31位	51'35"
	4区 9.5 km	親崎 達朗	16/31位	29'11"
	5区 7.8 km	西沢 晃祐	21/31位	25'09"
	6区 10.6 km	関口 大樹	17/31位	32'16"
	7区 12.9 km	田中 龍誠	19/31位	40'14"

【レポート】

今年度は3年振りの公道での開催となり、埼玉県庁出発～深谷駅折り返し～熊谷スポーツ文化公園陸上競技ゴールの全7区間、全長76.9 kmでレースが行われました。

レース当日は、ほぼ無風で日中にかけて20℃を超え、暑さを感じる中でのレースとなりましたが、ニューイヤー駅伝のプラチナチケット「12枠」をかけた熱いレースが展開されました。

今回は前半4区間にチームの柱となる選手を配置し、駅伝の鉄則である「レースの流れに乗る」ことに主眼を置き、昨年同様1区にはエースの加藤を起用しました。



クラブチームを含む全31チームが一斉にスタート

今年度の加藤は昨年末からの故障が長引き、シーズン前半こそレースに出場することが出来ませんでした。故障も癒えた8月には月間走行距離1000キロを超える走り込みを行い、10月初旬の5000mでは14分8秒台の自己ベスト更新、10日前に練習で行ったハーフマラソンでは1時間3分台で走破し、昨年度を上回る力をつけてレースに臨みました。

レースは昨年と同様の1区同様、先頭集団が牽制し合い、前半の5kmを15分20秒台で通過する超スローペースとなりましたが、6km過ぎからは一気に集団のペースが上がり、先頭集団のラスト5kmは13分台でまとめる中、加藤も14分10秒を切るスピードで追走し、先頭の選手とは21秒差、他の強豪チームの選手とも秒差の13位で2区の小林に襷を繋ぎました。

今年も加藤の力走のお陰で、先頭集団が見える位置で2区に襷が繋げられ、駅伝の流れを掴んだ中でレースを進めることが出来ました。



1区 加藤選手

2区は距離も短く外国人選手を起用出来るインターナショナル区間であり、強化実業団チームの大半が外国人選手を起用するため、スピード持久力が求められる区間です。

当社は、1500mで国内トップクラスの成績を残すスピードランナーで加藤とともにチームのエース格である小林を今年も2区に起用しました。

今年の小林は春先の体調不良、9月には脚の痛みを訴えて、継続した練習を行えず不安要素がありました。10月中旬に開催された朝霞市民体育祭のエキシビジョンレースでは3000mを8分11秒台の自己新記録で走り、駅伝本番に向け急ピッチでコンディションを上げてレースに臨みました。

レースでは外国人選手のハイペースを肌で感じながら、持ち前のダイナミックな走りで外国人選手に必死で食らいつくと、中盤以降は苦しみながらも、ペースダウンを最小限に食い止めて、2名の外国人選手に抜かれはしたものの、日本人選手のみチームでは最上位となる15位で3区の坪井に襷を繋ぎました。



2区 小林選手



3区 坪井選手

3区は16.5kmの最長区間となり、各チームともエース級の選手を起用してきますが、当社は新人の坪井を起用しました。

坪井は、今年度2本のマラソンに加え、トラックレースでも多くのレースをこなしてきており、駅伝後も12月に福岡国際マラソンの出場を予定し、練習の量・質ともに高いレベルで消化してきたため、期待を込めて最長区間に起用しました。

レースでは、入りの1kmは3分を少し切るタイムで落ち着いて走り出しましたが、後ろから追ってきたチームの選手に序盤から追いつかれると、リズムを上手く合わすことが出来ずに遅れだし、中盤以降も普段の力強い走りが影を潜め、最後までリズムに乗り切れないまま順位を3つ落とす18位で4区の親崎に襷を繋ぎました。

この一年、ロード、トラックと結果を残してきた坪井でしたが、今回の駅伝では自身の力を発揮できず、悔しい走りとなりました。

4区は9.5 kmの距離ですが、中盤以降の駅伝の流れを作る重要な区間となる為、各チームとも勝負力のある選手を起用しており、どんなレースでも安定した結果を出す親崎を起用しました。

親崎は昨年の大会で3区のエース区間を走り、16 km超の距離をしっかりと1 km 3分ペースで走っており、今回も1 km 3分ペースを意識してレースに臨みました。

レースでは、前方を走る選手が見えない中で単独走となり、序盤こそ1 km 3分ペースを意識して走り出しましたが、中盤以降は走りに力みが出てしまいペースを少し落としたものの、最後まで親崎らしい粘りをみせ、順位は18位のまま5区の西沢に襷を繋ぎました。



4区 親崎選手



5区 西沢選手

5区はこの駅伝では最短区間となる7.8 kmの距離で、当社は選手数の限られているチーム事情もあり、9月から故障の中で練習に復帰した西沢を起用しました。

西沢はこの1年故障を繰り返し、継続した練習が行うことが出来ず、今回の駅伝も脚の痛みと向き合いながらの出場となりました。

本来はキレのあるピッチ走法でロードに強い選手ですが、万全とはいかないコンディションの中、必死に動かない身体を前に進め、1つ順位を落とし19位で中継所に向かいました。

しかし、ここで先頭と10分の差が開き、6区の関口は既に無念の繰上げスタートをしており、無人の中継所にゴールしました。

厳しい走りとなりましたが、今後は故障しない身体作りをしっかりと行い、次回のレースでは本来の走りを取り戻して欲しいと思います。

6区は10.6 kmで、今年この区間を任された関口は繰上げスタートとなってしまった為、同じく繰上げとなったチームの選手と競りながらのレースとなりました。

関口は、春先のトラックシーズンでは調子が上向かず苦しい走りが続きましたが、夏から秋にかけて、しっかりと練習をこなし、ここ1ヶ月で調子を上げてきていました。

レースでは並走する選手達と1km3分少々ペースでラップを刻み、最後までペースを落とすことなく走り切り、6区に続き繰上げとなった田中のいない無人の中継所にゴールしました。

トラックよりロードを得意とする関口は、今ある力をしっかりとレースで発揮することが出来たので、これからのロードレースシーズンでの活躍に期待したいと思います。



6区 関口選手



7区 田中選手

7区のアンカーは12.9 kmと全区間で3番目に長い区間のため、当社は最後のポイントとなる区間に、ロードの走りに定評のある田中を起用しました。

ここ最近のレースでは10000mで29分台、ロードでも30分少々ペースで走り切っており、狙ったレースは外さない強さがある田中に自信を持ってアンカー区間を任せました。

レースでは、序盤から繰上げとなったチームの集団を積極的に引っ張り、勢いよく走り出したものの、3km過ぎに後方にいた選手がペースアップすると反応出来ず集団から遅れだし、持ち味である安定した走りも影を潜め、中盤以降もペースが上がらない苦しい走りの中、懸命に身体を前に進めましたが1チームに抜かれ、総合20位の3時間56分51秒でゴールしました。



【総括】

昨年度の大会で3つの強化実業団チームに競り勝つ結果を出し、今年度は新人の坪井の加入もあって、チームとしても昨年以上の結果を信じて挑んだ大会ではありましたが、結果として序盤の勢いを活かすことなく、2つのクラブチームにも後塵を拝す20位という結果に終わりました。

実力を発揮すべき選手が思い通りに走れなかった事態に陥った時にチームの流れを変えられる強さが現状のチームには無く、チームの脆さや課題を露呈する結果となりました。

この一年、チームでは多くの選手が自己ベストや入社後ベストを更新し、これまでにない勢いのあるチームの姿を見てきただけに、今回の結果は悔しさだけしかありませんが、謙虚に結果を受け入れて、チームの課題克服に向け、変わらず日々の活動に邁進して参ります。

また、今回の悔しさを1年間持ち続けて競技に向き合い、来年の大会では「結果」をもって、必ずや皆様に恩返しさせて頂くことを誓います。

最後に、今回の駅伝に際し、朝早くから沿道に駆けつけて頂き、温かいご声援を頂いた多くの会社関係者の皆様、テレビ放映で当社チームに多くの声援を送って頂いた皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今後ともチームに対し、皆様の温かいご声援を賜りますよう、何卒宜しくお願い致します。

以上